

3. 出稼ぎの機能と影響

益田 明美（明治学院大学）

一口に「出稼ぎ」といっても多種多様であり、その定義づけや分類、あるいは問題を全部網羅するのは、そうたやすいことではな
い。ここでは、実態調査の結果から、出稼ぎの機能および影響につ
いていくつかの分析を試みる。

まず、出稼ぎの定義であるが、農林省では出稼者を「一か月以上、
一年未満、居住地を離れて他に雇われて就労する者であって、その

就労期間経過後は居住地に帰る者をいう。(居住地を離れるとは、自宅以外の場所で寝泊りすることをいい、就労先の遠近を問わない)と定義している。

出稼ぎが問題となるのは、就労に際して、家族との別居生活を余儀なくされるところから、本人はもとよりその家族に様々な影響を与え、さらに郷里の村にも出稼者の不在から生ずる問題が少なくないからであり、他方、就労先が危険な作業を伴う、不安定な職場である場合が多く、事故も多いからである。それにもかかわらず、全国で三四万人を越える出稼者がいるということは、「出稼ぎ」というものが、出稼者自身をも含めて、できれば出稼ぎをしないで済むような生活をしたいと望みながら、なかなかやめられず、しかも受け入れ側でも出稼者に依存している、という複雑な要素を数多く備えているという事実を物語っている。つまり、今日の日本資本主義社会の下で「出稼ぎ」は、それなりの機能を果たし、もはや不可欠の存在となっているのである。

ところで、出稼ぎ自体は今に始まったものでなく、その歴史は近代社会以前に遡ることができ、さらに明治以降の資本主義の発展がまた農民の出稼ぎを生み出してきたのであるが、昭和三十六年以降の日本経済の高度成長により、出稼ぎの様相が一変してしまった。戦前の出稼ぎとして知られているのは、北海道・カラフト・カムチャツカ方面への漁業、酒造りの杜氏、みかん園・茶畑・養蚕の援農、あるいは農家子女の製糸・紡績工など、その数も決して少なくはなかった。そして、戦前および戦後も三〇年代後半までは、出稼ぎと

いえば暗いイメージを抱かせ、その特徴を挙げると、就業分野では農・林・漁業が多く、就労先は全国各地に及び、出身地も同様に分散しており、未婚の子女が多く、男子の場合は次・三男が中心であり、しかも、零細規模農家からの貧困なるが故の出稼ぎであった。ところが、三〇年代後半以降の出稼ぎは、就業分野が建設・製造業に集中し、就労先は関東・関西・東海地方に集中し、出身地は東北地方が圧倒的に多く、男子が殆どで、それも世帯主・あとつぎが多く、中・大規模農家からの出稼者がかなり多い、という特徴を示している。

昭和四六年に東京都労働局の委託により実施した出稼労働者実態調査では、このいわば「新しい形態の出稼ぎ」の特徴が出ていた。本調査は、出稼ぎ労働者が、現在、何に困り、何を望んでいるのか、そのニーズを明らかにし、そして、そのために何が必要とされるかを追求すること、さらに、出稼労働問題を支えるメカニズムは何か、特に、各事業所が出稼労働者をどのように雇用し、どのように位置づけているか、また、出稼労働者がこれにいかに対応しているか、を明らかにすることを目的として実施されたものである。その結果を見ると、今日、特に建設業においては、出稼労働者を雇用することとしては事業を十分に遂行することができないという状況にあり、なお今後もこの傾向は続くであろうと思われるが、その雇用の実態は、労働条件等がまだ不十分という感が強い。また、出稼労働者自身も、家族との別居生活のつらさを強く訴えながらも、やはりやめることができず、過半数は出稼生活の継続を表明している。

このように、多くの問題を抱えながらも、「出稼ぎ」はすぐには
なくならないであろう。そのためにむしろ、よりよい労働条件の下
で就労できるような対策が望まれるのであるが、「出稼ぎ」が地元
に与える影響も決して無視することはできない。出稼ぎに合わせて
農作業や村の諸行事が行なわれたり、主婦や老人に過重の負担がか
かったり、やはり変則的な生活になることは否めない事実である。
地域差があるとはいえ、出稼ぎが一般化し、深刻さが薄れてしまっ
ていることも問題であり、これらのことは、出稼ぎ多出地の一つで
ある秋田県大曲市で実施した実態調査においても認められた。

さて、最後に一つ強調したいのは、出稼ぎが、あくまで生活の本
拠地を郷里に置いての遠隔地における農外就労であり、挙家離村で
はない、ということである。すなわち、出稼者は、自らの土地や家
と深く結びつき、決して郷里から離れないのである。そこに出稼ぎ
の存続要因の一つが見出だせるともいえよう。